高橋氏が初めて運転した82年製UH-025をバックに。いまだ現役というのは、感動的でもあった。それだけ、整備がしっかりされているということ。「いや、日立の機械は修理いらず。それが一番いいところですよ」（高橋氏）
　柔道をしていたことから、手のひらは厚くがっちりしている。この手でレバーをしっかり握り、機械と一体となる。同時に、社員の皆さんのハートもしっかり握っているそうだ。

建機を支える司令塔
原寸大
手のひら
COLLECTION

家業を継いで「手元」修行を2年。倒れた父に代わって任された現場。原点はすべて「機械に乗りたい」想い。

株式会社高建工業
【埼玉県・川越市】

取材・文／荒川裕治　撮影／永田忠彦
取材コーディネート／小澤 徹（日立建機川越営業所）

高橋 博 氏

オペレータ歴
20年

たかはし・ひろし　昭和45年埼玉県生まれ。中学では柔道初段、高校では中距離走、そして今はゴルフが趣味というスポーツマン。平成元年に高校を卒業後、有限会社高建工業（当時）に入社。現会長である悦治氏の次男。自身も、家では2男2女のよき父親である。

「帰れっ！」
　ある日現場で、父親である悦治氏に怒鳴られた。何が原因だったか覚えていないが、悔しくて1時間以上もかかる家まで歩いて帰った記憶がある。
　いま振り返れば、あのときは、〝子供〟だったのだと思う。
　家業を継ぐべく、高橋氏は高校の土木科を卒業すると同時に、父親の元で働き始めた。
「すぐにでも機械に乗ってオペレータをやるぞ、と思っていました。しかし、『まずは手元をやれ』と父に言われ、2年間は修行でした。
　いくら機械が効率よくても、細かい作業は人力。手元の大変さを知らなければ、油圧ショベルに乗っても、チームとして呼吸が合いませんからね」
　周りに認められなければ機械に乗ってはいけない――そんな父の想いを察し、また理解もできた。
　だが機械に乗りたい――。その強い願いが、昼休みを使った重機操作の練習へと向かわせた。そして、ある日突然、「やってみろ」と泥山の積込み仕事を任せられることになる。乗ったのは、父が初めて買ったUH－025。父親の想いだけではなく、汗や涙、家族への想いが染みこんだ名機だ。
「初めて重機仕事を任せられたときは、うれしかったですよ。でも操作はぎこちなく、練習通りにはうまくできませんでした。車両感覚がまだわからない時期、ダンプにUHをぶつけてしまったときは、親父に申し訳なくて……（苦笑）」
　そんなある日、父親が倒れた。司令塔が不在となり、現場は混乱。だが工期は待ってくれない。高橋氏は二十歳そこそこのまま、現場の一切を託された。
「わからないことだらけ。すべて、周りの皆さんに教えてもらいながらでした。毎日仕事が終わると、親父のいる病院に行き、『どうすればいい？』って、聞いていましたね。見舞いじゃなく、仕事の教えを請いに行っていました。
　正直、プレッシャーはすごくありましたよ。でも、元請けさんから『親父さんの代わりなんだから』と励まされ、自分自身も『やらなきゃ』と。あの時代に、精神力はずいぶん鍛えられました」
　まだ若く研ぎ澄まされた時代だったからこそ、吸収も早かった。また、それ以上に日々激励してくれた周りの人たちに恵まれた。
「一人でできる仕事じゃないですから……」
　父親が第一線を退いたのは、高橋氏が30歳のとき。その頃、父への反発ではないが、日立建機以外の機械を求めた時期があった。しかし6年前、ZX75US－Aに試乗したときの、あの感触は忘れられなかった。
「手のひらでレバーを握った感触。レバーを通して自分とバケットが繋がったような感覚。特に水平引きをさせたときの手応えは最高によかった。日立が自信を持っていい技術ですよ」
　再び日立建機の油圧ショベルに乗り出し、数年後にはすべての機械が日立色に変わった。
　中でもZX200テレスコクラム仕様機は、もっとも衝撃を受けた機械。
「宅地造成など、狭い現場で真下を掘る推進工事が多く、ZX200が大活躍してくれました。今でこそ、スライドキャブで地下を目視できるようになりましたが、当時は手探り。バケットが底に突くのを、それこそ手のひらで感じながら、土を掘り出していました。もっとも深くて10mという現場もありましたが、工期と自分との勝負でしたね」
　この技術だけは、父親から学ばなかったものだ。
　昨年、父子は正式に会長と社長という関係になったが、事あるたびに父親から釘を刺されるのは、今でも相変わらずだ。
「すべてに対し、バランスを意識しています。機械を買うときだって従業員たちに相談しますからね。えっ、よそでは社長の独断なんですか？　みんなに相談して買うのですから、みんなが大切に扱ってくれる。機械だって、ファミリーの一人ですからね」
　果たして、現場で躍動する機械たちは保守整備が行き届き、どれもピカピカに輝いていた。

現場のきれいさと工期の短縮で、関係各所から高い信頼を得ている。受注に途切れがないという。「うちには営業はいません」（高橋氏）